

# 情報教育と視聴覚教育

近畿大学視聴覚教育におけるアルクネットアカデミー活用の試み

*Computer Assisted Education and Audio-visual Education*

—*Kinki University Audio-visual room and ALC Net Academy*—

真 砂 薫

In this paper, I address the difficulties of computer Information education in the university education program. My purpose is to investigate English learning systems and the differences in educational character between computer information education and audio-visual education.

In the first part of this paper, I explore how problems in the organization or system of the university disturb the promotion of foreign language education assisted by the computer or computer network. In my report, I rely considerably on the papers read at the annual convention of Language Education & Technology 2001 and the reports given by ALC Educational Company.

Stress is placed on the background problems of computer information education ( or computer- assisted education of foreign languages) at Kinki University and also on a proposed backup system for computer information education. It is important to note that not only the hardware but the system itself on the campus helps to accelerate education assisted by the computer.

The reevaluation of computer assisted education in the university may suggest to us a new idea of MANAGEMENT PEDAGOGY which is the study of the management of educational system, faculty development and student instruction. The question we have to ask here is whether computer assisted instruction can replace conventional face-to-face lessons.

The point that needs to be clarified is that the borderline between computer information education (computer- assisted education of foreign languages) and audio-visual education (language laboratory education) are beginning to disappear.

## 1. 視聴覚教育の現状から

近畿大学では2000年より視聴覚第1教室を従来のいわゆるLL教室からパーソナルコンピュータ(以下PCと表記)をブースにそなえた50席の教室に改装した。その際アルク教育社の、イントラネット環境を活用した英語学習システムALC Net Academy(以下ALC Netと表記)を導入した。それ以外にも語学教育環境の充実のために教室、機器の改装、充実に力をいれている。そこで近畿大学語学教育部視聴覚教育委員会は、今後の語学担当教員への教室配当の効率の改善をめざして、2001年度末にアンケート調査を行なった。従来のように教員が視聴覚教

室などの教室使用を申し出る方式から、教員が教室を希望するのではなく、その教員が必要な、機器や教室設備・環境を委員会に知らせ、それをもとに、学務課や委員会がその教員に最適の教室を配当するという方式に変えようとした。詳細は、巻末 APPENDIX を参照されたい。

その際のアンケートの結果から、ALC Net をはじめ教育用ソフト、教室設備、機器についての情報伝達が不足し、専任、非常勤共に、教員はどこにどんな設備、機器があるのかわからないままに、視聴覚教室、機器の利用申し込みをしていたことが明らかになった。ここに、外国語教育におけるマルチメディア教育の可能性と問題点が見えてきた。

## 2. アルクネットアカデミー (ALC Net) の概要と活用

**2-1. 紹介** ALC Net は、アルク教育社が開発したイントラネット環境を最大限に活用した英語学習システムである。その利点は、学習者がいつでも学べるフレキシビリティと、あらゆるレベルの学習者への対応教育システムであるということである。さらにその教育コンテンツは、最近さらに充実している。

コースについては、「一般英語コース」の中に、「スタンダードコース」と、「初中級者のための TOEIC スコアアップコース」がある。「専門英語コース」としては「基礎力養成のためのメディカル英語コース」(医学部向け)と「IT時代の技術英語基礎コース」(理工学部向け)がある。さらに近く「ライティングコース」(これはマウス操作による選択解答だけではなく、キーボード操作により英文を入力して解答する)と「第二外国語(ドイツ語、フランス語、中国語)コース」が加わる予定である。

**2-2. 受講の流れ** 代表的コンテンツであるスタンダードコースを例にとる。まず学習者は、レベル診断テスト(語彙力とリスニング力)を受ける。その成績によって、1. リスニング強化コース50ユニット、2. リーディング強化コース50ユニット、3. TOEIC テスト演習コース10ユニット、のどれかを選択できる。個人のレベルと希望に合わせて最良の選択が個々にできるのである。

**2-3. 個別対応の利点** 教室でのテープレコーダーを使っただけの一斉授業では対応しがたい個々のレベルと希望に対応した内容の詳細は次の通りである。1. 理解度チェックの後、(部分的)日本語訳や注釈、ヒントが学習者の選択で随時画面に提示される。2. リスニングのスピードが30%ダウン、30%アップ、50%アップ、100%アップと選択可能である。3. 注釈機能などで表示された語句の意味説明を個人の単語帳に記録、蓄積できる。4. 学習終了時に学習履歴表示が現れるので自己管理や、達成度確認、モチベーション強化が期待される。またこの機能

は受講管理システムに連動し、教員の学生管理、成績記録蓄積に役立つ。

**2-4. 受講者管理システムについて** 受講者の学習履歴はサーバーで一括管理される。管理者は受講者の学習進捗を PC で確認でき、テスト採点、学習時間などの学習記録を保存できる。これらの作業はマスター管理メニューによって行なわれ、受講者登録、追加、削除、受講者一覧の作成と修正が行なえる。学習状況を参照する場合、講座別、受講者別で表示することができる。

**2-5. 活用上の注意点と問題点** この学習システムを機能させるには PC 自由利用教室が必要である。あるいは既存の PC 装備の視聴覚教室をある時間帯は自由利用できるようにするなど教室管理運営上の工夫が必要である。近畿大学の視聴覚教育ではこのような多様なバックアップの体制が不十分であった。イントラネット環境での CALL 教育システムを十分に機能させるためには、機器、教材の導入だけでは機能しない。

同じ ALC Net を大学規模で導入し活用している例を熊本大学（教育センター）に見ることができる。その活用例のうち参考になる点を列挙しておく。

1. 授業時間帯以外の CALL 教室が8:40から17:40まで解放されている。
2. キャンパスが分散していてもネットの活用で場所の制約を受けない利点を活かしている。
3. 基本的にマウス操作のみで学習が進められる教材ソフトを利用している。
4. 随時 PC 操作の講習を行ない CALL 授業を受講しなくても教材ソフトで自習できるよう便宜をはかり、パスワードを発行するなど、普及につとめている。

アルク教育社教育ネットワーク部調べによれば、ALC Net は2002年3月8日現在、大学57校、専門学校1校、高専2校、高等学校1校で導入されている。利用されているコースは、初中級、およびスタンダードコースが大半である。利用形態は、授業+自己学習の形態が最も多く、自己学習学習のみの利用がこれにつき、授業のみの活用は少ない。ALC Net 導入大学では、コース学習プログラムに含まれる中間テストの利用をふくめ、学習履歴時間とテストスコアの両面からの記録管理ができるため、ALC Net 利用の CALL 科目を設け、単位認定を行なうところも多い。

### 3. 新しい授業実践にむけて

#### その1. 教員サイドの問題

近畿大学では、語学教育の充実にもむけて、新しい IT 教育棟の完成をはじめ、できるだけ多くの教室を50人規模の小教室にして、教卓設置のカセット、CD、MD のデッキを装備したり、ノートパソコン接続の液晶プロジェクターを教室に装備するよう努めてきた。また2001年度か

ら実験的に、共通テキスト使用と共に、学生貸し出し用のテキストカセットテープを用意し、教員を通じて学生に貸し出すシステムを試行した。つまりハード面での充実を急速にはかったわけである。そしてその事が、単純にして重要な教訓を与えてくれたのである。それは「ソフトの充実なくしては、いかなるハードウェアも機能しない」である。

「ソフト面の充実不足」、の具体的な意味、事例を列挙しよう。

1. 教員間の相互情報伝達(コミュニケーション)の不足。教室配当において、その教員のティーチングスタイルを十分に把握せずに教室配当をすると、移動ビデオキャスター設置の教室で十分な教員にPCまで装備した視聴覚教室があたり、CALLの実践可能な教員にその視聴覚教室があたらない。どの教員が、何のために、どの機器・施設を必要とするか、の情報収集不足。
2. 教員間のコミュニケーション不足を補う工夫の不足。近畿大学では、専任・非常勤の共通理解、意思統一のためのミーティングは、年度はじめに1回のみ。さらに機器に関しても、ようやく最近視聴覚機器に使用説明会を年度はじめに1回実施。また視聴覚教室などは、申し込み→抽選に近い状態で、やっと2002年度に向けて、希望教室の調査ではなく、必要機器、テキスト、ティーチングスタイルの調査の上、教室、機器配当を行なおうという試みを実施した。そのアンケートを通じて、多くの非常勤教員の側も情報交換を望んでいることがわかった。
3. 専任・非常勤合同の意思疎通の機会を増やすことは重要である。近畿大学は、非常勤への依存率が高い。また近年、新カリキュラムの導入、新カリキュラムでの共通テキストの使用、全学的なTOEIC受験と、その準備テスト、能力別クラス編成のためのアチーブメントチェックなど、英語担当教員の協力をあおぐ機会は増えている。しかしそのための合意や、授業実践のためのFDが十分でない、授業効率が悪いばかりか、不満のもとになる。懇親会を兼ねた年度はじめの打ち合わせ会よりも、(近畿大学で2001年度に実施したのだが、)ランチタイムのカジュアルミーティングや、機器使用講習会、FDを増やすことも重要である。
4. ALC Net 導入以後にわかったソフトあるいは人的組織の問題点、盲点がある。まず導入されたものがどんな学習システムか、非常勤をはじめ、専任もその内容、使用法の知識がなかったこと、また担当者の決定について、コンピュータを使った教育ソフトを実際に使用できる人材の選定、さらに育成といった面でまったく準備ができていなかったのである。(この事情も巻末APPENDIXを参照されたい。)その結果、視聴覚(CALL)教室を活用する意欲と能力のある教員に、その視聴覚教室、機器が配当できたとはいえない結果となった。近畿大学のように非常勤講師依存率が高い大学でありながら、CALL教育技能、機器活用能力や希望に関しての、教員と運営組織との情報流通が不足していた。確かに教員の機器運用の技能・能力にまで教員管理の範囲を広げる事には問題や不満もでてこよう。しかし、適材適所の、きめ細かい教員配置への配慮の必要性をALC Netが気づかせてくれたのである。

## その2. 学生サイドの問題

いわば購入が先行した形の ALC Net であったが、これを語学教育部英語科で活用しようとしたとき、これが授業実践や授業形態を見直す機会となった。特に学生サイドに関する問題点は次のようなものであった。

- 1.（専任教員間の意見交換から）語学教育の場合、いかに、学習者（以下この意味で「学生」とする）の自習時間を多くするか、が重要である。たしかに教員が90分の授業時間に教育活動の重点を置くことも重要である。しかし知識伝達、一方通行型の授業では、週1回、あるいは近畿大学新カリキュラムでの、同一クラス週2回でも、ドリルワーク的な練習を含めようとするれば、時間的に十分ではない。平均的な学生の現状の語学能力では、語学学習にかかる時間と教育効果は比例するのではないか。逆に、正直に言えば、予習や宿題さえも全く取り組まない学生の多さを考えれば、とにかく「机に（パソコンに）向い、英語にふれる時間」を増加させることが急務である。
2. 一斉授業でしかもクラスサイズが20名を超える場合、個人的な指導は困難である。授業中の指名指導も、その間指名以外の学生にとっては休憩時間になる。また近畿大学の場合、学期初めのアチーブメントチェックがあっても、やはりクラスサイズの増加によって、効果が相殺される。つまり1クラスに習熟度のばらつきが現れる。このことを考えた時、進度や問題の難易度、その都度のヒント、その学生なりの学習履歴（つまりノートとりや単語帳作り）の作成とその指導が実現可能な ALC Net は、教員が使いこなせれば、じつに魅力的なものである。
3. ここから新しい授業形態の構想がうまれる。それはPCの活用に大きく依存するものである。基本的理念は、teach から learn へ、である。学習の主体は教員ではなく学生であることを確認したい。教員の役割は、学生の学習を助ける補助者であり、意欲の増進者であり、また管理者である。さらに学習を学生に強要するのではなく、その効率的な実行を助ける計画者であり、学習環境デザイナーでなければならない。また学生側にすれば、彼らがすべき事は、より多くの学習（語学トレーニング）時間の確保と学習行為の実行である。それに加えてこのような学習システムなればこそ、自己管理能力が必要となる。このような学習システムを通して、それが学生一人一人にとっての自己管理能力の養成の機会となる。自己管理能力訓練は、学習履歴が明示され、また教員の管理も容易な CALL 教育の大きな副産物となろう。

具体的には、先に述べた熊本大学のように、学生集団を2つにわけて、前期 CALL/後期教員担当、または前期教員担当/後期 CALL のようにすることもできよう。このようにすれば、CALL 教室の数も節約でき、教員担当の面接授業も必ず受けられることになる。また、CALL 式自己学習の間に教員担当の面接授業を2週または3週に一度おこない、授業進捗のチェックや質問に答える、学習成果を見るテストを行ない、授業で補う、などの方法も考え

られる。教員は毎週どれかのクラスの面接を行なう。学生にとっては、面接授業までに学習履歴をふやし、進歩を進めるが、その時間配分や、スケジュールへの組み込みは自由である。

4. これらの構想を実現するためには、いくつかのバックアップ体制が必要である。その1つは、学生の利用できる自由利用教室、ならびにPC 端末を用意しなければならない。そのためにはイントラネット、学内 LAN 整備が必要である。こうなると語学教育部のような横割的組織が、各学部の縦割り組織に関わらなければならない難しさがでてくる。近畿大学の場合、視聴覚教室をふくめ、端末機が設置されている教室・施設の管理が学部別に行なわれていることが、学内配信型学習システムの使用を困難にすることがある。近畿大学の場合、語学教育部視聴覚教育委員会は直接には、視聴覚教室2教室のみの管理と、教員配当をまかされている。実際は、1教室は、学生ブースにテープレコーダーデッキが設置された従来型のLL 教室であり、もう1つの教室がPC 端末設置で、学生席2席の間に教員の画面を提示できるモニターをそなえたCALL 型教室である。この形態の教室は他学部管理の学棟にもあるのだが、利用も共同管理も容易ではない。注意したいのは、「情報教育」と「視聴覚教育」の内容は重複しつつあるのに、用語上や一般概念上は両者は別物と考えられている点である。

#### 4. 状況の変化 メディアの多様化の問題

機器、設備的な観点から、情報教育がPC と周辺機器、LAN を利用するのに対し、従来からの視聴覚教育とは、いわゆる視聴覚教室を使い、PC 以外の機器を利用した教育であるとの認識があるようである。実際、授業で利用する機器に関して、次のような問題に、近畿大学の視聴覚教育は直面している。以下、個別事例を列挙するが、問題の中心は、簡単に言えば、現代のオーディオ・ビジュアル機器の変化の速さと多様性に、教育現場がついて行き難いということである。

##### 事例1. メディアとしてのカセットテープの問題

近畿大学では、2001年度入学者から、英語では新カリキュラムを実施した。その趣旨の一つに、リスニングを出発点とし、アウトプットのまえにインプットを十分に行なおうという実践的英語能力の習得があげられた。そこで、英語科では、共通テキストに対応したカセットテープを学生に、貸し出しをして、個人的な予習・復習に役立てる体制をととのえた。しかしこのようにいわば音声教材の学生一人一人への供給の徹底での問題は、今日、学生がカセットテープレコーダーを自宅または個人で持っていない、ということであった。例えば教員が教材テープを貸出しても、再生機器がない。正確には、多くの学生が、CD、MD の再生や録音（CD-R、CD-RW への録音）は可能でも、カセットの再生はできないとの声が多かった。

そこで対策として、カセットテープを再生できる視聴覚教室の解放、自由利用（つまり学内

にいるうちにカセット教材関連の課題をやってしまう)、あるいは再生機器のある学生のところでグループ学習や、カセット→MDの移し変えをやってもらうなどの方法を考え実施した。しかし、すでに述べたように視聴覚教室の自由利用は、授業使用との調整、管理職員の増員など、さらに別の面からの負担がふえることが指摘され、廃案となった。

近年、安価な新書などの英語関連図書にもCDが付属するものが多くなった。大学用テキストにも、学生用CDが付くものも現れた。しかしテキスト用(教員用)には依然としてカセットテープが多い。数年前、関西大学(筆者の知る限り高槻キャンパス)では教員用にMDに録音した音声教材が支給されたのを記憶している。このように音声教材だけでもカセット、CD、CD-R、MD、MO入り乱れてのメディア混在の時代の影響を、視聴覚教育は大きく受けている、というのが実感である。

## 事例2. 今後の学内視聴覚教育環境の整備の問題

2001年度の外国語メディア学会(L. E. T)において、東京電気大学情報環境学部からの興味深い発表があった。大学入試の英語リスニングテストにMP-3を導入した報告であった。英語教育の変化とともに、リスニングテストの導入が、各大学で検討され、実施されつつある。一方入試の場合には、そのリスクを考え、リスニング実施を見送る大学も多い。東京電気大学の試みは、視聴覚、情報教育ならびにメディア教育の面で、次のような諸問題を考える機会を与えてくれたように見える。

1つは、リスニングといえば、各教室に、テープレコーダー、あるいはスピーカーを設置し、また受験生にいかにか均等な条件で聞き取りをさせるか、事故への対処をどうするか、が大きな問題であった。しかし問題(憂慮)をメディア技術が追い越したのである。MP-3の場合、受験生一人一人がヘッドセットを付けるので聞こえの問題はクリアできる。操作に関しても、現代の受験生にとっては問題なく、使用説明すらほとんどの受験生には不要とのこと。利点は、英語の時間中、自分のペースで、好きな時に、聞きたい箇所を何度も聞けることである。問題点は、問題の機密保持の問題や、聞き取りテストの目的として、1回のみ聞き取り機会こそ重要だと考える場合、リワインドして何度でも、が欠点になる、などである。

もう1つの問題は、MP-3のような機器への投資へのリスクである。しかし、入試以外ではMP-3を貸し出しなどで平常授業でも活用すれば、利用効率も上がる。大規模大学であれば、学部、学科限定で、リスニングを実施することも考えられる。

平成18年度からはセンター入試でもリスニングテストが実施されるような状況下で、大学の視聴覚教育設備の問題は、情報教育とも融合しながら、一方で大学入試との関連も明らかになってきた。このような事情を考慮すれば、根本的に必要なのは、大学規模の情報教育構想であり、縦割的な学部運営と、横断的・共通的な外国語教育などがいかに情報交換し、共通理念をもつか、である。

しかし視聴覚教育という言葉も決して、すぐに死語にはならない。なぜならば、教育現場では、依然としてテープレコーダー、教材提示装置、O. H. Pなども運用され、ハイテクとローテク(?)の共存状態は続くと考えられる。なぜなら、現任教員全員の、機器運用に関する技能が、短期間で向上するわけではないからである。さらに、現在のコンピューターのシステム全体が急速に変化し、進化していくことは間違いない。だとすれば学内の視聴覚・情報教育機器への投資も、すぐに時代遅れになり無駄になる可能性を含んでいる。ハードの追求のみでは、あまりにリスクが大きく、かつ本質的ではない。

結局、教員の個々のティーチングスタイルや個性を生かした教育を考慮に入れば、大学における情報教育の実現・向上には、効率的なカリキュラム、シラバス管理と、それに合わせた人事管理が必要となろう。今後の大学教育と運営の両面で、マネジメント教育学(MANAGEMENT PEDAGOGY)が、必要になると予想される。紙数の関係からも、詳細な検討には入らないが、大学教育においては、マネジメントはキーワードであろう。それは様々な分野に関係する。学内組織の管理、教員の管理、教育理念の管理や意思統一、教員、学生ともに自己管理能力の養成、などがマネジメントという観点から見直されることが重要である。

## 5. 結びにかえて

今回の報告は、学術的な研究報告というよりは、ごく具体的・実践的な実践報告である。これに意味があるとすれば、今回の近畿大学に見られたような、視聴覚教育と情報教育が交錯し、その中で教員が組織的な教育環境準備、体制作りに関わった場合の、問題点の列挙である。加えて、望みたいのは、このような状況下での、外国語教員団の取るべき方向の指針や試案の参考になれば、ということである。

最後に、簡単な内容のまとめを添えて、結びにかえたい。

1. 今後さらに進むであろう外国語教育のIT化は、単に機械・設備的な問題ではない。学内LANの整備などインフラストラクチュアの整備は欠かせない。しかし、それを機能させるには、学内組織の情報流通の改善が欠かせない。それは具体的に言えば、人的交流である。近畿大学を含め、組織の大きな総合大学の抱える問題はそれである。学部間、教員と事務の間の情報交流不足がCALL教育を妨げる原因になることを、この報告にあるように、発見し、痛感した。
2. しかし今回紹介した、いわば既製の学習システムは、筆者の見る限り、十分工夫されている。これまで、教員の個人的工夫と努力にまかされてきた、学生の平常学習履歴管理、小テストの作成と結果管理、個人のレベルにあったメニューなどの仕事の負担が軽減される可能性がある。教員サイドの視点からみれば、これまでの雑務的、単純作業の時間を、授業準備や教育の創造的分野にまわせる利点がある。このような教育の機械化は、教員を堕落させる



ものではない。ある意味での教員の負担はふえる。しかしそれが、創造的努力に結びつけば理想的ではないのか。

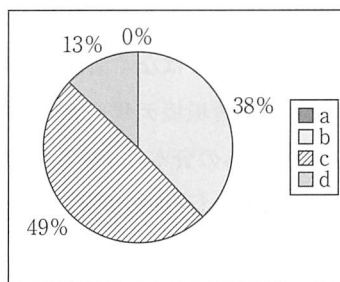
3. したがって、PC、LAN 利用の学習システムが与えてくれた諸問題は、逆にみれば、今後の指針、ヒントになる可能性がある。学生にとっては、学習は、与えられるものではなく、自分に合わせ、目標を設定し、実現の努力をし、工夫をする、いわば自己管理、自己成長プログラムを学ぶ機会となろう。教員は、教えるという知識の伝達者の立場から、次のような新しい立場にシフトするかもしれない。それは、学生の自己成長を助けるサポーター、であり、授業の指揮者ではなく活性化の役割をになうファシリテーターであり、大学を1つの環境とみなした学習環境デザイナーである。そして大学そのものも、時代の流れにそって行なった学内の IT 化への資本投下を、有効な投資とするためには、実は学部間をはじめ大学内の諸組織間の縦割り行政的管理が、未来の教育を阻害する最大の問題となることに我々は気づかなければならない。

APPENDIX 近畿大学におけるアルクネットアカデミーおよび視聴覚機器設備に関するアンケート  
2001年12月、近畿大学語学教育部英語科専任・非常勤教員対象に実施

1. アルクネットアカデミー※をお使いですか。(※2001年度から視聴覚1教室で使えるパソコン利用のTOEIC学習プログラムのことです。)

質問1-1 本年度現在の使用について

- a. 本年度、担当クラスで使用している。
- b. 知っていたが使用しない。
- c. 知らなかったので使用しない。
- d. 使用は考えない。



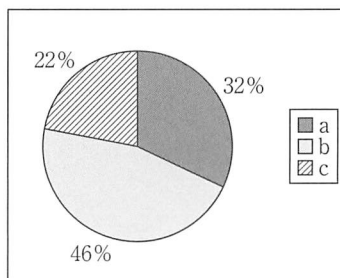
a	b	c	d
0	15	20	5

【意見】

◎名前は知っているが内容について分からない。

質問1-2 将来のアルクネットアカデミーの使用について

- a. 使用してみたい。
- b. 使用を考えたいので詳しく知りたい。
- c. 使用は考えていない。



a	b	c
12	17	8

【意見】

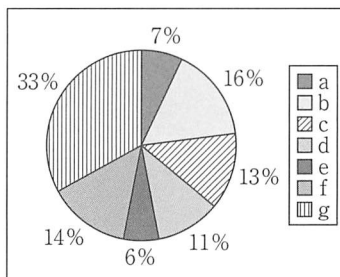
◎企業のものを採用するのはどうか。

◎このプログラムは自習用だと思われる。

質問2-1 次の教育機器のうち使用できれば使用したい、ご自分のティーチングスタイルに必要な機器を、《ぜひ必要》《できれば必要》にわけて、選んでください。

《ぜひ必要》

- a. パソコン b. ビデオ (DVD)
- c. 授業中ダビング可能な視聴覚教室
- d. CD プレーヤー e. MD プレーヤー
- f. 教材提示装置 g. テープレコーダー



a	b	c	d	e	f	g
7	17	14	12	6	15	34

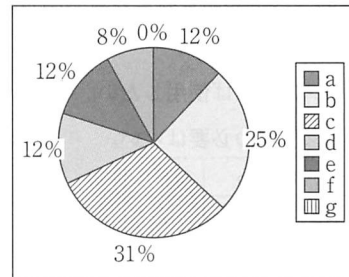
【意見】

- ◎担当科目、使用テキストによるため現段階では分からない（2人）
- ◎各教室に教育機器の設置を望む
- ◎ノートパソコンの画面を接続して映写できる設備が欲しい
- ◎各教室に備え付けのテーブルコーダーを設置して欲しい
- ◎ダビング用にDVD rewritable 機器が欲しい
- ◎パソコンはネットにつながないと様々な情報が収集できない

《できれば必要》

- a. パソコン b. ビデオ（DVD）
- c. 授業中ダビング可能な視聴覚教室
- d. CD プレーヤー e. MD プレーヤー
- f. 教材提示装置 g. テープレコーダー

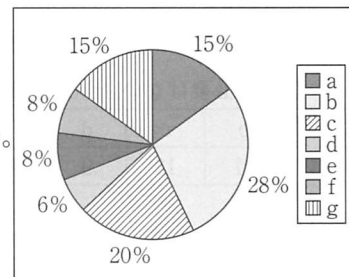
a	b	c	d	e	f	g
8	16	20	8	8	5	0



質問2-2 ご自身のティーチングスタイルと機器設備について

- a. パソコンを使った授業ができる・してみたい。
- b. ビデオ、教材提示装置、テープ、テープダビングのある視聴覚教室を使用したい。
- c. 一般教室で、ビデオ、テープが使用できればよい。
- d. 一般教室で、テープが使用できればよい。
- e. 視聴覚教室以外で教材提示装置を使用したい。
- f. 自分が指導して必要な部分を学生にダビングさせたい。
- g. 依頼してテープダビングしてもらいたい。

a	b	c	d	e	f	g
15	26	19	6	8	8	15



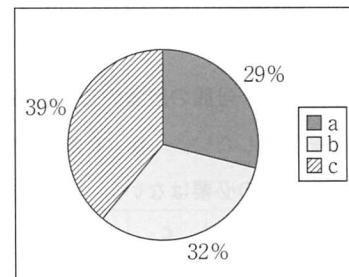
【意見】

- ◎カセットテープのダビングは人数が多いので大変

質問3 視聴覚1教室のご利用希望・可能性

- a. 使用したい。 b. できれば使用したい。
- c. 使用の必要はない。

a	b	c
10	11	13



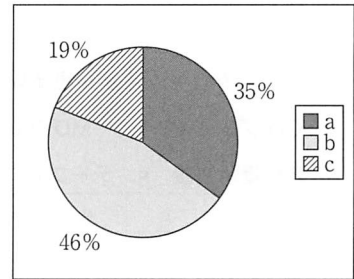
【意見】

- ◎担当科目、使用テキストによるため现阶段では分からない（2人）
- ◎TOEIC、TOFELなどの試験準備コースを担当する場合使用したい（2人）
- ◎パソコンの故障が多い
- ◎学生の英語力による
- ◎学生に自由に席を座らせるなら使用したい

質問4 視聴覚2教室のご利用希望・可能性

- a. 使用したい。
- b. できれば使用したい。
- c. 使用の必要はない。

a	b	c
13	17	7



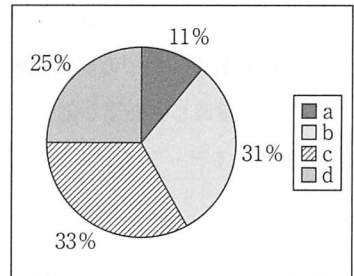
【意見】

- ◎担当科目、使用テキストによるため现阶段では分からない（2人）
- ◎学生に自由に席を座らせるなら使用したい

質問5 EキャンパスIT棟KUDOSコンピュータ・リテラシー教室のご利用希望・可能性

- a. 使用したい。
- b. できれば使用したい。
- c. 使用の必要はない。
- d. 詳細が知りたい。

a	b	c	d
4	11	12	9



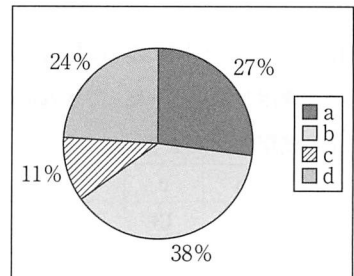
【意見】

- ◎TOEICなどパソコンを使った試験準備向き
- ◎ヘッドセットとカセットがつながってないので不便
- ◎遠すぎて移動に時間がかかる（4人）
- ◎時間割調整が可能ならば使用したい

質問6 11号館の教室のご利用希望・可能性

- a. 使用したい。
- b. できれば使用したい。
- c. 使用の必要はない。
- d. 詳細が知りたい。

a	b	c	d
10	14	4	9



【意見】

- ◎デッキを持って行ってる。備え付けのデッキはスピード調整できない
- ◎科目による。テキストがビデオ教材でなければ不要
- ◎ OHP も使用できれば良い

質問7 その他近畿大学語学関係の教育機器、設備について改善のヒントがあれば、  
お願いします。

【意見】

- ◎カセットレコーダーを持たない学生が多いので大学で学生が自由にカセットを聴けるブース  
の設置
- ◎アルクネットアカデミーは自習用に良い
- ◎語学機器にもう少し音の良い AV 機器を常設して欲しい（2人）
- ◎鍵は共通のもので1日借用が望ましい。授業教室が変わるたびの返却・変更は不便
- ◎改善を進めて欲しい。語学用の教室は VTR・CD・MD・CT を備えた教室が必要（2人）
- ◎各号館にテープレコーダーが備えてあれば良い。今のものは重量なので移動が不便
- ◎自習のできる視聴覚教室は是非必要、そこにアドバイス・ダビング等作業する人が常駐でき  
れば良い
- ◎隣の教室のマイク音声等が聞こえてきて授業の妨げになることがある。機器の充実と共に防  
音の対処を
- ◎はめ込みのカセットデッキを常設して欲しい。学生がわずかの時間を使って再生・ダビング  
作業ができるもの
- ◎現在の設備について詳細がわからない
- ◎他大学に比べると設備が劣るのでこれから IT 化を進めて欲しい